特集

「中之条ビエンナーレ2019」を終えて

中之条町　観光商工課

■31日間で39万人が訪れる

８月24日から９月23日までの31日間にわたり開催された「中之条ビエンナーレ2019」では、展示会場47会場に対し累計で39万人の方にお越しいただき、多くの皆さんに現代アートと中之条町を楽しんでいただきました。

７回目を迎えた今回は、例年よりも２週間早く開催され暑い日が続きましたが、多くの方々の支えのもと、無事に終了することができました。お越しいただいた皆さん、関わっていただいた皆さんに対し、改めて御礼申し上げます。

受付ボランティアのみなさん

■国際色と地域色が共に豊かに

中之条ビエンナーレは、温泉街や木造校舎などを舞台に、町内各地で現代アート作品の展示をはじめパフォーマンスやワークショップなどを開催する芸術祭です。年々国際色豊かになり、約150組の作家のうち３分の１は海外からの参加、約20の国と地域から作家が集まりました。

一方運営では、行政区の皆さんや婦人会の皆さんが総出で会場受付をしてくれたり、作品の素材を町民の皆さんが一緒になって探してくれたりと、地域との関わりが深いことも特徴です。

町のおばあちゃんの日常会話で自然と「ビエンナーレ」という言葉が漏れる、そんな光景に出会えることは、大変ありがたいことです。

小学校での作品制作

■2019の特徴

準備年を加えればもう14年も継続している中之条ビエンナーレ、その中で新しい取り組みを少しご紹介します。

①ボランティアサポーター「ナカミーゴ」

以前から作品制作のお手伝いや会場受付などのボランティア組織はありましたが、新たに「ナカミーゴ」（中之条の仲間（Amigo）という意味）と命名し、「アソブ」「マナブ」「クリエイティブ」を指針として、新しい組織として立ち上げました。会期中はたくさんの「ナカミーゴ」が参加し、運営を助けてくれました。今後は「ナカミーゴ」主体の企画を行うなど、より活発で楽しい活動ができればと考えています。

春田美咲「echo」（旧第三小学校）

②エデュケーションプログラム

児童･生徒との共同制作は以前もありましたが、今回は選考段階からエデュケーションプログラム作家を採用し、計画的な学校との連携のもと、授業内での作品制作を小中学校の多くのクラスで実施させていただきました。児童･生徒が携わった作品は展示され、地域とビエンナーレとのつながりを深めることができました。

③町民アートプロジェクト

実行委員独自企画として、町民目線でのアートプロジェクトを運営しました。その中でも「中之条町手をつなぐ育成会」が主催している「なかんじょアートミーティング」を中心に、障がいをもった方たちの作品展「わがんまアート」を実施することができ、大きな反響を得ることができました。

石坂孝雄「夏の終わりに」
（日向見公園）

これら新しい試みは、どれも作家とサポーター、作家と地域の方々を結び、人と人とのつながりを強める取り組みであったと思います。今後も中之条ビエンナーレを継続していくためには、応援してくれる方々の一層の理解が大切だと考えており、今回の中之条ビエンナーレ2019では、その点で次につながる良い一歩を刻めたのではないかと考えています。